

シャロレ伯爵 (5)

リヒャルト・ベアー＝ホフマン著
松川 弘*・訳

(平成29年10月25日受付)

Der Graf von Charolais (5)

von
Richard Beer-Hofmann

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

(Received Oct. 25, 2017)

書記：

(肩をすくめて)

想像には、敬意も羞恥もないんですよ。

裁判長：

(興奮して)

男なら誰でも、それらを見たらそんな想像をすると、君は思っているのか？

書記：

(事態にさほど重きを置かないように努めながら)

あなたがまだ若かった頃、誰かがとても気に入ったとき、何を考えたか、思い起こしてみてください。

裁判長：

(しぶしぶ)

それとこれとは話が別だ。
わしの娘に限って……。

書記：

(微笑みながら)

その娘の父親たちも、「わしの娘に限って」と言ったに違いありませんよ！

裁判長：

(怒りを押えつけて)

それじゃ、君は、彼女を見た男はみんな、そんな想像をすると、本当に信じているんだな。

書記：

(慎重に)

彼女が一人の女性であると考えられる可能性があるとして申し上げているんです。

裁判長：

(立腹して)

「女性」だって！ それはどういう意味なんだ？

書記：

それじゃ、「処女」と言いましょう。

裁判長：

「女性」, 「処女」だって！ 君の言い様は、一語一語淫らがましく聞こえてならん！

(怒鳴り始める)

君は一体わしに何が言いたいんだ？

* 広島工業大学工学部電気システム工学科

書記：

(真面目に)

あなたがお尋ねになったことです。

裁判長：

(ひじ掛け椅子に腰を下ろす。しばらくして、ひとりひそかに)

わしは、そんな考えを抱いたことは、今まで一度もない！もちろん今もだ！ あの子が生まれて以来、わたちは一日も離れ離れでいたことはない。だから、わしには、あの子がわしの傍らでどんなに成長したか、気付かなかったんだ。あの子は、わしの「傍ら」じゃなく、木の幹から枝が分かれているように、わしに「密着して」いる。あの子とわしには、同じ体液、血液が循環しているんだ。「わが子」という言葉は、「わが腕」と同じ意味を持つのだ！「わが子」というよりはむしろ、わしの一部、わし自身なのだ！それが今や「女性」なのか！男がそれを欲しがり、さらに悪いことに、自分から男を求める「女性」だということか！彼女が生まれる前に、すでに、わしは彼女を愛していた。

(書記に)

六十歳で結婚したとき、わしは子供が欲しかった！人生行路の最後を、わしはたった一人で行きたくはなかった！若者が回りにいれば、もっと楽に死ねるに違いないと思ったんだ！愛情もなく、ただ柔和で、善良で、良家の出というだけの理由で、わしは自分の妻を選んだ。そして、彼女が子宝に恵まれたことを知ったとき、わしは初めて彼女を愛した。彼女が早産の床に就いたとき、わしは思い切っ

(手を組み合わせて、天井を見上げる)

て部屋に入り、彼女を見た――。

彼女は死にかけており、傍らには、まだ生きる準備が出来ていない赤ん坊がいた。わしはもう我慢出来なくなって、庭に駆け出した。外は月もなく、風も凪いでいた。頭上には空はなく、夜があるばかりだった。わしは、窓の前の菩提樹のそばの地面にひざまずき、天に向かって手をもみ合わせ、叫んだ。「生まれてこの方、わしはあなたの存在を信じてきました。そのわしが、今更、あなたに絶望することができるとお思いか！妻と子供をお助け下さい！」それから、わしは、答えが返ってくるかと耳をそばだててみたが、だめだった。わしは顔を伏せ、額を硬く尖った砂利に押し付けて叫んだ。「わしから、すべてを奪い取らないで下さい！両方とはいいません。わしは老人なのです。一方だけでもお助け下さい！子供をお助け下さい！」そのとき、突風が音を立てて吹き降りてきた！そして、再び静かになった！一枚の木の葉が落ちてきて、わしの目蓋をかすめると、目の前のハート形の砂利の上に乗った。立ち

上がったとき、わしは、神の声を聞いたように感じた。わしの願いは神に聞き届けられた、そうわしは思ったのだ。

(一瞬、瞑想にふけり、それからまた、ひそかに)

わしは、窓が開く音を聞いた。むせび泣きや嘆きがつれ合った音が聞こえ、それらは、かすかな、悲しげでない泣き声によって圧倒された。それは、わしが今まで耳にしたことのない、聞き覚えのない声だった。わしの子が泣いているのだ！奇跡が起こった！そう彼らは言っていた！それ以来、わしの身に起こったどの出来事も、これほど凄くはなかった！嵐や雷雨、華麗な星空、造化の奇跡で、神はわしに語りかけたのではない。わが子の回らぬ舌に、わしは神の声を聞き取った。わが子のおかげで、わしは敬虔になったのだ。君の場合、子供を育てたのは奥さんだろう。わしにとって子供が何を意味するのか、わしがどんなに子供を愛しているか、君には理解できまい！今ここに、誰かがやってきて、自分はあなたを愛していると彼女に言うでしょう。娼婦の接吻でまだ暖かい唇で、彼は彼女に接吻するだろう！わしが彼女の額に口付けしたとき、それは、わしの子供を護ってくれた神にたいする無言の祈りだった。だが、彼は口を密着させて彼女と接吻し、息もできなくなるくらいに体を密着させて、彼女をしっかり抱き締めるだろう。言葉と視線で、彼は彼女の感覚を熱狂へと駆り立て、彼女の眼に濡れた情熱が浮かんでいるかどうか、ひそかにうかがう。この情熱が、彼女から、彼にたいする抵抗力を奪うのだ。それから、彼は、彼女のあわれな手つかずの体を、いやらしい経験豊かな指でまさぐろうとするのだ。ああ、胸がむかむかする！

書記：

(肩をすくめて)

知恵と老年の冷静な観察に耐えられるものはごく僅かです。それに愛があります！愛は、愛のみによって見られることを望んでいるのです！

裁判長：

それが愛と呼べるとすれば、その通りだ！これはよくあるケースなんだ！彼女が金持ちの女相続人で、孫を欲しがると彼の父が彼に結婚を強いており、彼が彼女のことを気に入っているので、あの男は彼女を妻に選ぶだろう。彼女は、彼にとって、食卓や寝台の整え役以上の存在になれるのだろうか？彼女は一人の女で、彼は「女たち」を知っている。彼は、ある女には金を払い、別の女をあざけり笑う！彼には、彼女たちが、彼同様、神によりこの世に遣わされた被造物であって、彼より多くの重荷を背負っていることが分かっているのだろうか？彼女たちは、彼とほとんど差がないのに。男はその習慣をやめるだろう。しか

し、女には、実り豊かな大地の胸ふところで、相変わらず夢見ることが許されている。夜の星や海が従っている不可思議な太古の契約から、まだ解き放たれることなく、彼女は——怠慢な女神官のように——月の満ち欠けや血、苦しみによって、ここで自分に課せられた使命を、男の眼に何が自分の分裂、謎、そして恐らくは魅力として映るのかを思い知らされるだろう！ それらの要素の最後のものは、恐らく、彼には、自分の運命を万物の永遠の運命と結び付ける唯一のきずなに思われるだろう！ 彼にはそれを知る必要はなく、知ることもない。それは、彼の意識下であって、彼の愛の底に隠れて眠り、彼を善良にする！

書記：

(親しげに、なだめるように)

よくは分かりませんが、あなたはその彼を見出されたのでしょう……。

裁判長：

(立ち上がって、部屋の中を行ったり来たりする)

いや、まだだ。見つけたとしても、彼は老人だろう。若さというものは、残酷なものだ。彼は残酷になるだろう！ 彼が彼女を愛していても、彼女に飽き飽きしていても、彼らは苦しむ。熱していれば嫉妬し合い、冷えていればはねつけ合う！ わしは、毎晩起きて、彼女が胸に手を載せて眠っていないかどうか確かめ、彼女が夢魔に悩まされていないかどうか気遣った！ わしは、彼女の夢の中の苦しみをさえ取り除いてやろうとしたのだ！ 今に、彼女は、決して彼女のことで思い悩まぬ男のことで苦しむようになるだろう。そして、彼を愛していれば、その苦しみも喜びに変わるだろう。彼女は、そのことをわしには秘密にし、彼のためにわしを見捨てるだろう！ このわしを！ 彼のために！

書記：

(肩をすくめて)

それはすでに聖書に書かれている通りです。

裁判長：

その通りだ！ それ以上に造化がそれを求めている！
だが、このわしは、

(自分の額を打つ)

この愚かな老人は、造化にあえて逆らいたい！ 造化は確かにわしより強力だ！ すべてを先に延ばし、せめてわしが生きている間はそばにいてほしい、その後はどうなってもかまわない、と自分に言い聞かせた方が気が楽なことは確かだろう！ しかし、それは間違っている！ 彼女は、

ずる賢い求婚者の手に委ねられており、そんなことは許されないことだからだ！ わし自身が、そのことを心配してやらねばならない。わしは、彼女よりも鋭く見なければならぬ！ だが、一体誰をだ？ わしの意に沿う男はどこにいるのだ？ それに、わしとその男を見つけたとしても、彼女はわしの選択に従ってくれるだろうか？ わしは彼女と、そのことについて話し合わねばならない。すぐに、明日でも！ いや、明日じゃだめだ！ わしくらいの年では、毎日が神の贈物とっていい！ 今日だ！ 今すぐ！

(決心して、呼び鈴を鳴らす)

今すぐだ！

(老下僕が入ってくる)

娘に、こちらへ来るよう言ってくれ！

(下僕は、庭に通じるドアを通過して立ち去る)

(計算書を手にして立っている書記に向かって)

わしは君に感謝せねばならない。

書記：

私にですか、閣下？

裁判長：

(行ったり来たりしながら)

君はわしを眠りから覚ましてくれた。わしは確かに暢気に眠っていたが、起きている方が娘にはいいようだ。

書記：

この後、お嬢様と話し合われるおつもりじゃないんですか？ あなたは興奮しておいでです。お体に障りますよ。

裁判長：

それをしないと、わしは落ち着かないんだ！

(書記はお辞儀をして、出ていこうとする)

今日、もう一度会えるかな？ この計算書について、何か君に言っておきたいことがあったんだが。すっかり、忘れてしまってるんだよ。正午頃、大会議室に来てくれ！ その頃には、思い出しているだろう。済まないね！

(彼に手を差し出す)

(書記は退室する)

裁判長：

(書き物机の左手のひじ掛け椅子に腰を下ろし、ひそかに)
彼女にどう言えがいいだろうか？

デジレー：

(入ってくる)

何ですの、お父様？

裁判長：

もっとそばに来なさい。
(彼女の腕をつかんで)
ずっとそばに！

デジレー：

(びっくりして)
何があったんです、お父様？

裁判長：

別に何も。

デジレー：

手が冷たいですよ。ご気分でもお悪いの？

裁判長：

病気だって？ いや、わしは年老いているだけだよ。

デジレー：

またそんなことを・・・。

裁判長：

朝に紅顔あって、夕べに死する身だよ。

デジレー：

やめてください！ そんなこと考えたくもないわ！

裁判長：

だからこそ、お前の行く末を考えなきゃならんのだ！

デジレー：

でも、なぜ今日、今、考えなければならぬんです？

裁判長：

むしろ、なぜ今頃になって、と言いたいくらいだ。わしはこの年まで、お前の若さを目の当たりにしながら、それが永遠に続くものと思って生きてきた——話をさえぎるな——わしは今、わしがいなくなっても——泣くんじゃない——お前と一緒にいる男を、この目で見たくなくなったんだ。だからこそ・・・。

デジレー：

(思わず裁判長の腕を離し、少し左手に歩む)
お父様は、私のために選んで下さったの？

裁判長：

まだ選んではない。わしが知りたいのは、宮殿や荘園で見かけた若者たちの内で、お前が気に入った者がいるかどうかだ。

デジレー：

(きわめて無造作に、少し微笑がら)
存じません。

裁判長：

どうしてだ？ 会いたいと思う者はいないのか？

デジレー：

会いたいですって？

裁判長：

(少し当惑して、探るように)
そうだ。幼な馴染みに会いたいというのは違うぞ！
娘として若い男に会いたいという意味だ。

デジレー：

娘として若い男に・・・。
(少し心配になって、説明を求める)
お父様は、なぜ私がそんなことをするとお思いになるの？

裁判長：

(少しためらって)
わしはお前に聞いているんだ。

デジレー：

(戸惑い、少し傷ついて)
私に、そんなことをさせたいんですか？！ お父様がお考えのようなことが、私に出来るとお思いになって？ 今まで、あなたは私に、男と女をそんな目で見えることを一度も教えては下さらなかった。
(裁判長が腰掛けている椅子のひじ掛けにもたれて、手を彼の肩の上に置く。時折、過去を回想し、親しげな微笑みを浮かべながら、淀みなく話し続ける)
昔——私がまだ小さかった頃——冬に、食前、雪に埋もれた庭の池に通じる道を下りていった時のことを覚えておられますか？ そこはいつも昼頃、日当たりがよかったですからね。私はあなたに——いつものように——朝習ったこと、神がこの世界をどのように造りたもうたかを物語らねばなりません。そのとき、私は、指折って数えながら言いました。「神は、水中の小さな生き物、空中のすべての鳥を、五番目にお造りになりました。そして、六番目に、

男と女をお造りになりました。」あなたは、「そうだ。でも、「人間をお造りになりました」が先だよ。それから初めて「男と女をお造りになりました」となるんだ。」とおっしゃり、身をかがめて、地面から一羽の鳥を拾い上げられました。その鳥は死んでおり、雪の中に足を縮めて横たわっていたのです。あなたはそれを私に差し出しましたが、その鳥は、あなたの手の中でやさしく庇護されているように見えました。あなたは、こう言われたのです。「お前は、これが雄か雌か知りたいんだろう？ それだけじゃだめだよ。この鳥は、自由に空中に舞い上がり、その喉に限りない歓喜を秘めていた。まだ生きることが出来たのに、苦しみとひどい寒さで死んでしまったのだ！ お前はこれから、神が男と女を造りたもうたことを、念入りに教え込まれるだろう。それまでは、神は人間を造りたもうたと、銘記しておくがいい！」そうあなたが言われたとき、回りの塔から、正午の鐘が鳴り始めたのです。鐘の音はだんだん大きくなり、木の枝からは雪が音を立てて落ちました。お父様は帽子を脱いで祈られましたが、「子供」という言葉を、あなたは、おずおずと見上げている私ではなく、眼前の、自分が正視することのできる何者かに向かって投げかけられているようでした。「人間」——そしてもう一度、小声で——畏敬を込めて、「人間、子供、人間」と、あなたはつぶやかれました。

裁判長：

(彼女にやさしく微笑みかける)
よく覚えていたね！

デジレー：

(身を起こして、裁判長のひじ掛け椅子のうしろに回る「覚えていた」という言い方は適切ではありません。覚えたことは忘れてしまえます。それは、泉のような私の心に、深く、重く沈んでいます。そのうえ、溢れて流れ出しさえしているのです。心の底に沈んでいながら、すべてのものに輝きと色彩を与えているのです！ あなたの一言が、私をこれほど豊かにしたのです！ あなたの言葉はどれも、私をめぐる愛と不安から生じたもののように思われます。あなたのまなごしはどれも、私を愛のマントでくるんでくれます。自分の手をこうあなたの肩に置いていると、自分の身には何も起こらないようにさえ思えるのです。そのあなたが、何に強いられるでもなく、何に駆り立てられるでもなく、私を突き放そうとなさるなんて！

(裁判長にすがりつく)

私は離れたくありません！ そばに置いてください！ あなたのそばにいれば、私は安心なのです！ あなたのそばがいい！ 私を離さないでください！

裁判長：

お前を手放す？ わしが？

(彼女の手を握る)

そうだ、わしはお前を手放すんだ！ 運命が、時間が、わたしたちを引き離す！ わしは、お前のことが心配でならない！ わしがいつか死んだら、彼らはお前に求婚するだろう。効き目のあることだけが演じられる。抑圧された情熱、おずおずした愛情は、お前を避け、ただ、遠くから羨望のまなごしを送る。厳粛さと悲哀に包まれた愛情は、魂以外の何も求めない。言葉に羽根を与える愛情、くちごもるだけの愛情は、往々にしてお前をこっそりくるみ込み、不意打ちを食わせる。愛情は、天使のそれのように優しく演じられることもあるし、鎌首をもたげた野獣のように情欲に燃えて演じられることもある。誰もお前に注意してはくれない！ 金持ちの女相続人は、包囲され、駆り立てられる。ある者は、自分が貧しいのでお前を望み、またある者は、莊園が隣接しているから、大公が重んじるわしの名をお前に見出してお前を望む。

デジレー：

(裁判長から離れ、うしろに下がる。少し傷ついて)
そんな方が私を愛しているなんて？！

裁判長：

(身を起こす)

そんなやつは最悪だ！ 彼は演じる必要なんかない。若さが、感覚が、彼のために演技し、こっそり彼に耳打ちするんだ。彼の血管の脈拍が、熱狂的な言葉を唇の上に押し出す。彼は——嘘しか信じないが——自分では嘘をつかず、信じ込ませるんだ！

デジレー：

それじゃ、お父様は愛の存在をお信じにならないの？！

裁判長：

(窓辺で)

いや、わしは信じているさ。信じているとも！ 夜たまたま、よく知られた星の軌道を炎を上げてはずれるのが見える、あの火の玉の存在も信じているさ。あれはどこから来て、どこへ行くんだろう？ お前は毎晩、窓辺に立って、あれを待ち続けるのか？ 世にも稀な愛を、お前は待ち続けるつもりなのか？ 人が愛だと言ってお前に売りつけるのは、衝動や習慣、支配欲、うぬぼれ、呪い、魔法がごちゃごちゃにもつれ合った毛玉なんだ。その毛玉は、毎日新たに出荷されているんだ！ 愛か？

(帽子を引っ張る)

——そんな経験は、わしの人生ではあまりなかったが——
愛に出会うたびごとに、わしはじっとその前に立ちつくしたものだ！ それは、神が選ばれたものの心の中のみ掻き立てる情炎にたいして、わしが常に畏怖心を抱いていたからだ！ それがお前の定めなら、お前の心には愛が生れるだろう。しかし、愛を待つこと、それは神を試すことにほかならない！

デジレー：

それじゃ、私は何をすればいいんですか？

裁判長：

(デジレーのかたわらで)

わしが「この男にしろ！」と言ったとき、わしを信用することだ。わしは、富や名前に眩惑されたり、声望や権力に心を奪われるような父親じゃない。わしは、それらが、家の筆筈に掛かっている晴れ着のようなものに過ぎないことを知っている。生の熱い吐息が枯れ果てることのない男、泉さえ噴き出している男、歓声をあげて喜び、悩むことのできる男、そんな男を、わしは探しているのだが……。

(上を見やって)

どうか、そんな男が見つかりますように！ 彼を見逃すことがありませんように！ 彼が見つかったとき、お前も、わしが言ったようにしてくれるかい？

デジレー：

(優しく微笑んで、少しあきらめ気味に)

ええ、それでのお父様の心の安らぎが得られるのなら。

裁判長：

(強情に)

いや、わしの心の安らぎなどどうでもいい。要は、お前がわしを信頼してくれることだ。

デジレー：

(手を彼の肩の上に置く)

それでは、「私はお父様を信頼しているのだし、お父様の心の安らぎが得られるのでしたら」と言わせて下さい。嘘じゃありませんよ。

老下僕：

(裁判長の帽子とマントをもって入ってくる)

乗物の用意が出来ました。

裁判長：

そうか！ 開廷だな！

(書き物机に歩み寄り、書類を探し集める)

デジレー：

私も連れて行って下さい！

裁判長：

なぜだい？

デジレー：

そんなに長い間お父様に会えないと、今日、私つらくなりますもの。——今日だけじゃないけれど——私たちが一緒にいたことはほとんどありませんのよ。お父様！ そうじゃなくって？

裁判長：

済まないことをした！ お前をすっかり不安に落し入れてしまったようだね。

デジレー：

何も言わないで！

裁判長：

もうそのことは考えずに、わたたちが一緒にいられることを喜んでくれないか。
(ドアの方を向く。下僕が彼にマントをはおらせ、帽子を手渡す)

デジレー：

それじゃ、連れて行っては下さらないの？

裁判長：

ヴェールをつけて、バルバラと一緒に後から来なさい。最上階を開けさせておこう。分かったね？

デジレー：

ええ。

(しばらく物思いにふけてぼんやり前を見つめる)

裁判長：

それがお前に似合っているかどうか分かるように、新しい服を着てくるんだよ。それじゃ！

幕

第三幕

(法廷。装飾のない、白い漆喰を塗った大広間。背後の壁には、高い位置にあって天井まで達する狭い窓が三つある。薄い淡黄色のカーテンが引いてある。前面には(張り出し舞台と平行に)深紅色のテーブルクロスの掛かった長く幅の狭い判事の机が、二段高くしつらえられた壇の上に置かれている。机のうしろには、五つの大きな椅子がある。壇の左隅に、赤いテーブルクロスの掛かった小さな机が、その前に、書記用の椅子が置いてある。

両側壁の真ん中に、それぞれドアがあって、側壁に沿って前の方に、被告と原告用の椅子が三つずつある。

背後には、階段が、真ん中の窓の下にある小さな演壇に向かって七段延びており、分岐して、さらに七段、左右の小さな階上席に通じている。この階上席には、さらに脇のドアを通して立ち入ることができるようになっている。

判事の机には、赤いダマスク織りのガウンを着た裁判長と四人の判事がすわっている。裁判長は、ガウンの上に、広い襟とシロテンの縁取りのついた赤い錦織りの重いマントをはおっている。小さな机には若い書記が、左手のドアには廷丁がいて、二人とも黒い服を着ている。

左手の側壁には三人の債権者が、右手の側壁にはシャロレがすわっている。彼のうしろでは、ロモントが壁にもたれている。

右の階上席には、しなやかな黄色い絹の服を身にまとったデジレーがいる。彼女の顔は、金のレースの薄いヴェールで隠されている。彼女のうしろにはバルバラがいる。

左の階上席には、制服と胸甲に身を固めた兵士たちがすわったり、壁にもたれたりしている。黒服の市参事会員や裁判長の書記もいる。

正午に近く、窓が高い位置にあるので、広間の下部分は、薄暗闇の中に沈んでおり、上にいくにしたがって明るくなる。)

顧問官：

(判事たちに向かって、納得のいく説明をしようと努めながら)

結論を申し上げますと、それに従えば債権者が債務者の遺体を差し押える権利を有する法律がずっと以前から適用されていないではないかという異論は、時効になったのが権利だけであって、法律ではないし、しかも、この事件についての昨日の裁判所の命令に対して、異議申し立て人から何ら異論が申し立てられていない以上、無効なので……。

シャロレ：

(低い声で)

どうして「何ら異論が申し立てられていない」などと言えるんです！

顧問官：

(シャロレに向かって丁重にお辞儀して)

法律に照らして重要なことは何も申し立てられていないのです。私は、伯爵がここで申し立てられたことを、人間として、私人として十分理解したつもりですが、あなたは、当り前のことしか証拠として引き合いに出されていないのですから……。

裁判長：

(低い声で、不満げに)

これじゃ、問答にならん。初めの発言を終わりまで続けなさい。

顧問官：

(困惑して)

無効なので……。

裁判長：

(いらいらしながら、書記に向かって)

記録係、書き取るんだ！

書記：

「この事件については、異議申し立て人から何ら異論が申し立てられていない……」

顧問官：

(落ち着きを取り戻して、話し始める)

その通りです！

何ら異論が申し立てられていないので、昨日の命令をその趣意に即して承認し、異議申し立て人の請願を棄却することを、ここに提案いたします。

シャロレ：

(腕を組み眉に皺を寄せて聞き入っているロモントに向かって)

彼は何て言ったんだ？

これはまだ裁決じゃないだろう？

裁判長：

まだ裁決じゃない。しかしすぐに裁決が下るだろう。君はまだ我々に言うことがあるかね、伯爵？

ロモント：

(立腹して)

もちろんあるとも！ 我々のために平和を闘い取ってくれた彼の父親がいなければ、あんたたちはその椅子にすわってはおれなかったんだぞ！ この建物は焼き払われていたかも知れない！ 「法律に照らして重要な異議」にもかかわらず、あんたたちは略奪され、打ち殺され、その遺体は「先の裁判所の命令」もなく野外で朽ち果てていたかも知れないんだぞ！ そしてあんたたちの妻はやつらに……。

裁判長：

(腹を立てて、力強い声で)

君はいったい誰の名代で話しているんだ？ 君は弁護人なのか？ 服装と話しぶりがそれを否定している。まなざしで威嚇したり、刀のつかに手を掛けたりするのはやめて、黙って目を伏せていなさい！ 秤と剣を両手にもった盲人が今、話しているのだから！ 伯爵、もう一度聞かすが、君はまだ我々に言うことがあるかね？

シャロレ：

(立ち上がって)

何もありません！

今判決が下されたら、それが永久に確定するのか、そのことだけをお聞きしたいのです。私はもう抗告できないのでしょうか？

裁判長：

(諭すように)

君は今、この国の最高裁に出庭しているんだよ！

シャロレ：

我々の上には……？

裁判長：

神がいるだけだ！ その間には誰もいない！

シャロレ：

(債権者たちに向かって、早口で)

まあ、僕の言うことを聞いてくれ！ 君たちがそれを拒む必要はどこにもない！ 大目に見てくれというんじゃない、君たちと取り引きがしたいんだ！ 親父の遺体の差し押えを解いて、生きているこの僕を、担保に取ってくれ。僕を債務者とみなして、債務拘留してくれ。

裁判長：

君が今言ったことは、聞かなかったことにしよう！ だが

君は、彼らと和解したがっているようだから、君にそのための時間を少し与えよう。本裁判は、しばらく中断する。

(低い声で)

恐らく、判決を下さなくても済むだろう。

(裁判長と他の全員が立ち上がり、裁判長は、深くお辞儀する債権者のそばを通り過ぎて、判事、書記、廷丁を従え、左手のドアを通して、広間から出ていく。左の傍聴席は空になっている。債権者たちは、ゆっくり右手のドアに向かう。シャロレは、急いで彼らに追いつき、一瞬、行く手を遮って、彼らと並んで歩きながら、性急に話しかける。)

シャロレ：

(債権者たちに)

どうだね？

イーツイヒ：

我慢するだけです！

飾り布の仕立屋：

(軽い身振りで、イーツイヒと粉屋に、先に行くよう、せき立てる。彼らはゆっくり、シャロレをかわそうとするが、彼は、同じ方向に進みながら、彼らに話しかける。)

よく考えてみます……。

シャロレ：

(性急に)

この上、まだ何を考えるというんだ？

あんたたちの利益は明々白々じゃないか！ 捕らわれの身になりたくはない生身のこの僕を、塔に閉じ込めさえすればいいんだ。そのときはじめて、君たちには、僕がどんなことでもするということが分かるだろう。僕は、議会にしっかりと嘆願し、最高裁の長官に嘆願書を出し、大公に哀願し、無心の手紙を書き、知人みんなに泣き付いて、拒絶されてもあきらめず、何度でもせがみ、彼らが——同情からではなく——嫌気がさして、この僕を再び自由にするまで、彼らの耳許でわめき続けてやる。僕は、貴族を自認しているすべてのものに拠金を募ろう。僕の名前だって、彼らから金をゆすり取れるくらいの価値はあるだろう。あんたたちが自分の金を、僕が自分の自由を手に入れるまで、僕ははいつくばり、騒ぎ、哀泣してやる！

イーツイヒ：

(立ち止まる)

取り引きのために、わたしたちを説得なさるおつもりだろうが、わたしたちは一向にありがたくないね！

粉屋：
そうですとも！

シャロレ：
本当にそう思っているのかい？！
取り引きに応じたほうが身のためだよ！ さもなければ、僕は今日、辞表を出して、さっさと国外に退去してしまうよ。そして、遠い外国で職に就き、過去を思い起こすこともなくなるだろう。過去のことなんか、もうどうでもよくなるんだ。

イーツイヒ：
(頭を揺すって)
そんなことはありえない！

シャロレ：
そうだとも！ すっかり忘れてしまうさ！
おい、ユダヤ人の親父さん、あんたは僕に悪意をもってるな！ 今朝、僕が絶望していたので、それがずっと続くと思っているんだろう？ 確かに僕は情にもろいさ！ だが、傷はそれほど深いものじゃない。父が死んだのが一昨日なので、二、三日は、恐らく数週間はまだ悲しみが残るだろう。でも、それも次第に薄らいでいく。僕には分かる。今から三か月もしたら、僕は、いつもの暢気者に、あいも変わらぬ朗らかな男に戻っていることだろう！ 僕の申し出を受け入れた方が得だと思うよ。だって、僕がいったん国境を越えたら、あんたたちの金ももう戻っては来ないんだからね！ それから僕が外国で一山当てても、あんたたちには何の役にも立たないんだから！ 僕が金の皿で食事し、ムーア人や女たち、野獣を飼うような暮らしをするようになって、あんたたちは何一つ得られないんだよ！ あんたたちが僕のところに来て、父の遺体を差し出しても、僕は、「ありがとう！ こいつは僕にとって以前は価値があったんだが、だんだんその価値が下がってきて、今はもう、見覚えもなくなっているんだ。あんたたちの持ち物は、今は僕を喜ばせないんだよ。ご苦労さま！」と言うだろうね。あんたたちは絶望して引き下がらざるをえない。というのも、それがあんたたちの最後の希望であり、あんなに暴利をむさぼっていたあんたたちも、今は落ちぶれ果てているからだ。あんたたちはもう何も持ってはおらず、僕の父の遺体が残されているだけだ。それをたらふく食らうがいい！ 僕の申し出を受け入れて、早く「そうしましょう」と言うんだ！ 今すぐ、僕を連行して、塔に閉じ込めればいいんだ！ 文書で話をつけよう！ 僕が後悔しないうちに、早く紙とペンを持ってきなさい！

飾り布の仕立屋：
(最後にドアから出ていきながら、振り返って)
時間をください！

(シャロレは、しばらくためらって、彼らのあとを追おうとする。ロモントが間に割ってはいる。彼は、「待て、僕に任せておくんだ」とでも言うような断固とした身振りを示して、急いで債権者たちのあとを追う。シャロレは、開いたままのドアを歩いていく彼を見送り、裁判長の呼び掛けに気付いて振り向く。シャロレが最後の科白を語っている間に、左前のドアを歩いて、裁判長と書記が入ってくる。書記が裁判長に何か言おうとする。)

裁判長：
(彼の言葉を受け付けず、シャロレの最後の科白に聞き耳を立てる。廷丁に目くばせし、廷丁は彼の肩からマントを取る。その間、彼はに向かつて語りかける。)
ちょっとここで腰掛けておいてくれ！

(書記に、書き物机のそばのひじ掛け椅子を指し示す。)
伯爵、お話があるんですが！

(シャロレはゆっくりと裁判長の方に歩み寄る。裁判長も彼の方に進む。裁判長はシャロレの肩に手を置く。声をひそめて)
あなたの父上は存じ上げています。ずっと以前から、父上に好意を持っていましたし、彼もまた同様でしたろう。だから、それに、私があなたの父上の父であってもおかなくいくらいの年齢なだけになおのこと、私の忠告をお聞き入れ願いたいのです。先ほどの申し出を撤回し、成り行きに任せなさい！

シャロレ：
(彼の方を見ず、ひとりひそかに)
成り行きに任せるだって！

裁判長：
大公があなたを援助し、議会があなたを釈放してくれるなどと期待してはなりません！ 今、この国は貧しく、みじめな状態にあるのです。

シャロレ：
(落ち着いて、しかし、次第に苦々しげに)
あなたはそれを誰に向かつて言っているんです？ 子供の頃、私は、朝焼けよりもむしろ、村々が燃える炎の朝空への照り返しを見慣れていたんですよ。昼の太陽のもと、肥料を撒かれるばかりで耕されることのない畑から屍臭が立

ち上り、夜のしじまで、次第に多くの兵たちが隊列を離れ、もはや嘆く気力もなく、道端で横たわって死を待ち、その回りにはすでに黒い鳥たちが舞っていました。毎晩が恐ろしく、夢魔が私の胸のなかで踊り狂っていたのです！これが私の幼年期——この国のみじめに埋没した、楽しい幼年期でした。私はこの国に何ひとつ期待していません！

裁判長：

それでは、あなたの友人はどうなのですか？

シャロレ：

友人ですって？

(ロモントを指さして)

私には彼以外に友人はいません。彼もまた私同様貧しいのです。

裁判長：

(債権者たちを指さして)

何の得にもならないと分かたら、彼らは、あなたを拘禁し牢番にあなたの食費を支払うことにうんざりするとも思っているのですか？ そんなことはまずあり得ません。彼らがどんなにけちでも、その費用くらいは用意できるし、彼らはそのことで他の債務者たちを脅迫するつもりなのです。

シャロレ：

(落ち着いて)

それは分かっています。

裁判長：

それじゃ、あなたは一体何を当てにしているんです？

シャロレ：

(目を上げず、辛辣に)

何を？ 何も当てにしてはしません。

私が先程言ったことは、あれは嘘っぱちです。自由の身になるために、私は何もしはしません！ 何をしても無駄だから！

(辛辣に)

何を当てにできます？ 私は、何も当てにしていな

し、何の望みもありません。ただひとつだけ、埋葬をお許し頂きたい。葬式を出さずに、ただ遺体を埋めるだけでいいのです。これでは死んだ家畜と同じですが、私にはそれで十分なのです！

裁判長：

そのために何年も——恐らく一生——牢獄にはいることになっても構わないのですか？

シャロレ：

もちろん、構いません！

裁判長：

よく考えなさい。

シャロレ：

(拒絶するように首を振って)

今は何も考えられません！

裁判長：

「拘禁される」ということが何を意味するのか、知っているんですか？

シャロレ：

私は、それを経験したいと思っているのです。

裁判長：

(いらいらして)

あなたは子供の様な物言いをされるが……。

シャロレ：

父を愛している子供の様な！ まさにその通りです！

裁判長：

私の忠告に耳を貸すべきです！ あなたは利口なんだから！

シャロレ：

私が利口だって？ 調子が良すぎるからでしょう！